

常照

第792号

今年もあとわずか

十二月二十二日は冬至です。ご存じのとおり春分、秋分は昼夜の時間がほぼ同じで、夏至は一年の中で日照時間が最も長く、逆に冬至は日照時間が最も短くなると昔から言われています。

どれくらい違うのかと先日調べてみました。ちなみに日照時間とは日の出から日の入りまでの時間です。札幌で夏至（六月二十二日頃）の時、日照時間はおよそ十五時間ちよつとあるようです。対して冬至の時は、日照時間が九時間しかないそうです。数字で見ると

こんなに違うのだと驚嘆するばかりです。

日照時間が短いので、当然気温も早く下がります。昔の日本では冬至のころになると秋野菜の収穫も終わって、食べられる野菜もほとんどなくなっていました。そこで元気に冬を越せるように栄養もあつて保存もきく南瓜を大切に、食べていたようです。冬にビタミンなどの供給源が不足した時代、南瓜は貴重な栄養源だったようです。

あるいは暖をとるために柚子湯に入ります。柚子と融通がきく、冬至と湯治。なんて洒落のきいた言葉遊びも込められていたそうです。

何にせよ季節感はどうどん失われています。暖房器具が発達し照明が煌々と照らす現代社会にあつては、寒さや暗さもそうですが、日照時間が短いということの苦労はなかなか実感しづら

いのかもしれません。しかし日が落ちれば必ず夜になります。違う言い方をすれば冬至とは最も夜が長い日のことです。

無明長夜（むみょうじょうや）

仏教用語に無明長夜という言葉があります。「無明」は、根源的な無知のこと。とあり、それがずっと続いている。迷いや煩惱によって悟りを得られないでいるさま、生死流転していることを長い夜にたとえた言葉です。親鸞聖人もこの無明長夜という言葉をご和讃の中で味わっておられます。

無明長夜の灯炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもとなげかざれ

（正像末和讃）

「灯炬^{とうこ}」とは、その語彙をたずねますと、「灯」は「常」のともしび、「炬」は「大きな」ともしびという意味を持っています。これは阿弥陀如来の「必ずあなたを救う。必ずあなたを仏に仕上げる」という本願のはたらきを、私達を照らし導いて下さる、消えない大きな灯火^{とう}灯炬^こという言葉で表現されているのです。

次に【智眼くらし】という言葉は、私たちの認識する世界^二肉眼^一に対する仏様の眼、苦しみを超える智慧の眼という意味です。これが暗し。暗いのです。私たちは、自分自身の欲望や怒り・腹立ち・妬む心に振り回されて生きています。自分の姿や自分が今どこにいるのかさえわからないような真つ暗闇の中に長い間閉じこもっているようなものです。そうした者をも常に大きな光明で照らし、浄土へと行き先を定めて

導いてくださるのです。

さて、導いてくだされば一安心……かと思えばそうとも言えないのがこの私であります。私の暮らしぶりを尋ねますと、仏様、阿弥陀さまを尊いものとして拜んでいるだろうか？手を合わせても自分の悩みや苦しみは解決しないし、病氣も治らなければ、お金もふつてこないし。自分の力量を頼りにするしかこの人生を乗り越えていく方法はないのだ……と思つてはいないだろうか？【罪障おもし】と親鸞聖人が述懐されたのはどういう心情だったのでしょうか、有無でしか物事を判断できない、ありのままに物事を見ることができない、常識という名の偏見で生きているのが私達です。親鸞聖人は生死の大海を、左訓に【六道にまどふを大海とた

とふる。大海はうみなり（一念多念証文）とお示しくださっています。要するに何回生まれ変わっても、仏になる見込みのない場所で沈んでいるのだと。しかしそんなことは阿弥陀さまの側からは予見されていたことで、そんな沈みゆくものを船筏、船のごとく乗せて渡すというというのが阿弥陀と申す仏さまのはたらきです。あらゆる者を迷いの世界から悟りの浄土へ往生させるために渡していくのです。

あらゆる者を必ず救うはたらきを本願と仰ぎ、この命を引き受けてくださる仏を阿弥陀と仰ぐことで、私達は人生を悲観することなく、胸を張って生きていけるのだよと親鸞聖人が伝えてくださっているような気がいたします。

令和二年 年回表

一周忌	令和元年	寂
三回忌	平成三十年	寂
七回忌	平成二十六年	寂
十三回忌	平成二十年	寂
十七回忌	平成十六年	寂
二十三回忌	平成十年	寂
(二十五回忌)	平成八年	寂
二十七回忌	平成六年	寂
三十三回忌	昭和六十三年	寂
(三十七回忌)	昭和五十九年	寂
五十回忌	昭和四十六年	寂

※詳しくはお寺にお尋ねください。

一月の常例布教(法話)のご案内

○前期 一月九日(木)～十一日(土)

長崎教区 島原西組 浄源寺

講師 三浦唯正師

○後期 一月十三日(月)～十六日(木)

山口教区 美祢西組 正隆寺

講師 波佐間正弘師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使のご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただき
ご聴聞にご来院くださいますよう、お待ちし
ております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四四番
FAX (〇一三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六一六番